



新刊紹介

1. 藤原彰子——天下第一の母——
(ミネルヴァ日本評伝選) 隼谷寿著
2. 誓願寺文書の研究
——戦国・京都・総本山—— 誓願寺文書研究会編
3. 戦国の城の一生——つくる・壊す・蘇る——
(歴史文化ライブラリー 475) 竹井英文著
4. 鎖国と開国——近世日本の内と外——
(日本学術研究叢書 24) 辻本雅史・劉序楓編
5. 海軍大将嶋田繁太郎備忘録・日記 I
——備忘録 第一～第五—— 軍事史学会編 黒沢文貴・相澤淳監修
6. イブン・バットゥータと境域への旅
——『大旅行記』をめぐる新研究—— 家島彦一著
7. 中世共同体論——ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人——
アルフレート・ハーファーカンブ著
大貫俊夫・江川由布子・北嶋裕編訳
井上周平・古川誠之訳
8. ヴィルヘルム 2 世——ドイツ帝国と命運を共にした「国民皇帝」——
(中公新書) 竹中亨著
9. ホロコーストを生き抜く
——母の伝記と娘の回想—— イレーナ・パウエル著
河合秀和訳 早坂眞理翻訳協力

隼谷寿著

『藤原彰子』

——天下第一の母——

(ミネルヴァ日本評伝選)

ミネルヴァ書房 二〇一八・五刊
四六 三四〇頁 三〇〇〇円

「この世をば我が世とぞ思う望月の欠けたることのなしと思へば」という和歌をご存知であろうか。寛仁二年(一〇一八)十月十六日、娘の威子が立后したことで、一家で三后独占を成し遂げた藤原道長が高らかに歌い上げたものである。本書が刊行された二〇一八年は、この「望月の歌」が詠まれてからちょうど千年にあたる。

本書は、そんな藤原道長が栄華を誇っていた時代に、一条天皇の中宮、後一条天皇・後朱雀天皇の母としてその摂関政治を支えた、藤原道長の娘、藤原彰子の一生を、『平安貴族と邸宅』(吉川弘文館、二〇〇〇年)『藤原道長―男は妻がらなり―』(ミネルヴァ日本評伝選) ミネルヴァ書房、二〇〇七年)などを著わした隼谷寿氏が辿ったものである。

第一章「道長と倫子の女君」第二章「一

条天皇の后」第三章「皇子の誕生」は、彰子の幼少期から中宮時代にかけて彰子が権威を得ていくまでの過程が、父道長の動きと合わせて丁寧に解説されている。第四章「皇太后時代」第五章「太皇太后時代」では、三条天皇、後一条天皇の治世において後一条天皇の「母后」としての権威を用いて父道長の政権を支えた姿を明らかにしている。第六章「女院出家する」では三十九歳で出家し女院となった彰子が依然として大きな影響を及ぼしていたこと、第七章「最晩年のことども」は彰子の晩年と政治の動きについて書かれている。全体を通して彰子の生涯を追いながら、摂関政治に強い影響力を持った彰子の姿とその背景を明らかにする構成となっている。

本書の大きな特徴の一つは、立后問題や立太子問題など彰子が深く関わった大きな出来事だけでなく、彰子やその周辺人物が関わったと考えられる政務・儀式に関して、『御堂関白記』を始めとして『小右記』『権記』『左経記』『春記』などの古記録の記述に忠実に、その日の参加者の動き、内容まで丁寧に解説されている点である。こ

れにより彰子だけでなく政務や行事に関わっていた公卿らの動きも同時に追うことが可能となり、彰子が「母后」として影響力を強めていく過程が見えやすくなっている。また、説明にあたっては従来の研究成果も豊富に引用されており、彰子の一生を辿りつつこの時代への理解も深めやすくなっている。加えて、彰子周辺の人物の居住地や移動についても詳細に分析されている。

その一方で、古記録からでは分かりにくい彰子の身の回りに起こった出来事や彰子の描写を、『栄花物語』や『紫式部日記』などの記述から説明し、その都度関連の和歌・漢詩などを紹介しているのも特徴的である。古記録の記述とともにこれらの記述も引用することで、当時の宮廷社会の人々の生き生きとした姿が伝わってくる。本書に登場するのは彰子だけでなく、彼女と関わりの深かった藤原北家の人物はもちろん、紫式部・赤染衛門・小式部内侍など彼女に仕えていた女性についても紹介されており、華やかな宮廷文化についても知ることができる。

従来歴史学・国文学の側面から説明されがちであった藤原彰子が生きた時代を、最新の研究を引用しつつ様々な視点から鮮やかに説明している本書は、初心者にも読みやすいながら研究者にとっても得る知見の多いものとなっている。多くの人に一読をお勧めしたい。

(大津純)

誓願寺文書研究会編 『誓願寺文書の研究』

——戦国・京都・総本山——

岩田書院 二〇一七・一二刊
B5 九二頁 八四〇〇円

京都の繁華街、新京極にある誓願寺（浄土宗西山深草派総本山）は、豊臣秀吉の京都改造で現在地に移されたが、それ以前も上京一条小川にあって多くの参詣者で賑わった。庶民の信仰を集め、賽銭が経営の柱となり、同寺の供僧に「散銭」を安堵した足利義詮判御教書は、賽銭の初見史料として知られる。これを含む同寺の文書は、東京大学史料編纂所・京都市歴史資料館に影

写または写真による複製が架蔵され、利用されてきたが、まとまった翻刻は存在していなかった。

『言経卿記』を輪読する研究会のメンバーが京都市内巡見の一環として誓願寺で文書を調査、その重要性を確認し、一九九七年、誓願寺文書研究会を発足させた。都合三十八名の参加者が三八七回の研究会を重ねて本書の刊行に至る。息の長い仕事にふさわしい重厚な本に仕上がった。上製七四六頁の本冊、無線綴一七六頁の別冊、境内絵図のトレース図二点をあわせて貼箱に収納。それでこの値段は破格の廉価である。

本冊は三部で構成。第一部総論は、調査の概要、誓願寺文書および同寺に関する研究史、そして寺史をたどる。第二部史料編は、誓願寺が所蔵する明治初年までの文書(縁起等を含む)一九八点を編年で収め、関係史料として、他所に伝わる文書六四点、記録・地誌からの抄出を集成する。第三部研究編は、大鳥聖子・中島敬・鍋本由徳・平野明夫・鎗田恵美子の五氏の論考一四篇を載録。巻末には詳細な関係文献目録を置く。別冊は誓願寺所蔵文書の写真を掲げ

(長大な二点は除外)、その図版は十分判読に堪えるものになっている。

かかる構成は史料の多角的な検討を可能にする。たとえば、八三号誓願寺証文目録は、図版を見ると、山科言継の筆になるもので(東京大学史料編纂所所蔵史料目録データベースで『言経卿記』の画像と照合されたい)、最後に別筆で「山科殿御添状 同(永禄八十二廿九)」の一行が書き加えられていることがわかる。「山科殿御添状」とは八〇号山科言継書状のことで、関係史料として収める『言経卿記』永禄九年(一五六六)正月一六日条から、同日言継に伴われて参内し、正親町天皇に対面した誓願寺住持泰翁慶岳が、前月二九日付の論旨や女房奉書とともに受領したことが知られる。すると、八三号も直後に言継から手交されたもので、誓願寺側で八〇号について加筆したと考えられる、といった具合に。

この泰翁は三河の出身で、同国と京都との間を往復しながら活動した。徳川家康は、永禄九年に近衛前久の執奏によって叙爵・任官と同時に「公家成」を遂げたが(赤坂恒明「元亀二年の『堂上次第』について」『十六

世紀史論叢』一号、二〇一三年)、前久につないだのは泰翁である。家康と京都を結ぶ泰翁の役割こそ、研究会の代表にして松平・徳川氏の研究で知られる平野氏が誓願寺文書の調査を企てた最初の理由であった。

副題「戦国・京都・総本山」は、誓願寺文書の特徴を簡潔にまとめたものだという。はたして、応仁の乱から元和年間までの文書が過半を占め、関係史料も同時期のものが充実し、初期洛中洛外図屏風が描く十六世紀の都市生活のありようをよく伝える。また、現在の総本山という位地に至る過程で、江戸時代前期までに円福寺と数度の相論を重ねており、この訴訟に関わる文書が少なくない。本書は、寺院史はもちろん、戦国都市京都や、幕府・朝廷における訴訟に関する研究にも裨益しよう。広く活用をおすすめする次第である。

(末柄豊)

竹井英文著

『戦国の城の一生』

——つくる・壊す・蘇る——

(歴史文化ライブラリー 475)

吉川弘文館 二〇一八・九刊

四六 二三四頁 一七〇〇円

城館のありかたを一生になぞらえる。とかく城主の関係を抜きにして考えることが難しい城館をどのように叙述しているかと刊行が待ち遠しかった。文献資料を博搜し、時に論文に仕上げ、またある時は自身のブログで語り懸ける著者が、どのように城館を考えているかがうかがえる。そのような一書として期待された。著者は「城はどのように築城され、維持管理され、廃城となったのか、廃城後の『古城』は戦国社会や近世初期社会のなかでどのようなものとして存在していたのか」と本書の視角を端的に投げかける。その視角に基づき構成は、城の一生—プロローグ、築城、維持管理、廃城、「古城」、「古城」のゆくえ、その後「古城」—エピローグ、以上の八章となる。

プロローグおよび築城の章では、近年の城館をとりまく状況について触れるほか、研究上の大きな論点について触れる。そこでは「村の城」論・戦国大名系城郭論・聖地論・城館と交通路などが論じられる。近年の重要な論点が概説されており、読者が最新の研究課題をつかめるよう配慮されている。また、とかく城館の書籍は築城や戦争へのかかわりが焦点となるが、構成に明らかなように、著者の視線はそれ以外の維持管理や廃城にも向けられる。この点は近年の研究成果を踏まえた叙述である。それにしても市民がよく疑問に思っ質問する事項、例えば「城には木が生えていましたか」などが、文献資料で応えられる限りのことで、目一杯に語られている。このことも興味深い。

しかし、本書の最大のメリットは廃城後の「古城」について分析を深めた点である。島原の乱の際の原城の存在で示されるように、廃城となった城館が再利用される。それゆえ「古城」の把握の重要性が論じられ、時として維持管理されていることすらあると論じられる。振り返ってみれば、指摘さ

れるように、戦国時代にあっても一度築かれた城館は常に維持されるのではなく、廃城と再興の繰り返しだったことに気づかされる。今後の戦国城館を考える上での重要な視点であろう。

とかく、「戦国時代のお城と「軍隊」の関係」とでも言えるような歴史的事実に基づかない一般書が多いなか、一般読者は城館すなわち軍事的イメージという呪縛から解放されえない。その状況のなかで城館から歴史を考えることができるようになるためには、このような良書が広く読まれることが望まれる。

ところで、随所で杉山城（埼玉県嵐山町）が触れられる。評者もまさか「梶山の陣」の史料が城館研究の契機であったとは、ついぞ知ることがなかったが、著者はこの史料との出会いがあつてこそ、中世城館研究の方法論の見直しという研究史の一時期を画する仕事に携わることとなったと記す。いまだにキャンパスで学生に間違われるというまだ若い著者に、研究がいかなるインパクトを与えたかもうかがわせる、興味深い一書でもある。

(齋藤慎一)

辻本雅史・劉序楓編

『鎖国と開国』

——近世日本の内と外——

(日本学術研究叢書 24)

国立台湾大学出版中心 二〇一七・九刊
A5 二九四頁 七六〇元(台湾ドル)

本書は二〇一五年六月に台湾の中央研究院で開催された「日本の鎖国と開国」を主題とした国際シンポジウムの研究成果をまとめたものであり、台湾大学日本研究センター編集の「日本学術研究叢書」の第二四輯として出版された。以下、各章の内容を概ね紹介する。

第一部「鎖国論—その変遷と現在—」は、藤井譲治「『鎖国』の捉え方—その変遷と現在の課題—」(第一章)を収録している。この章では、近世後期から現在に至るまでの「鎖国」をめぐる認識や議論を詳細に整理したうえで、「鎖国」の形成・崩壊の過程に着目するか、国家体制や外交体制に着目するかによって「鎖国」の捉え方も異なることを論じた。

第二部「鎖国の内と外」は三章構成であ

る。W・J・ボート「愛のためではなく、お金と利益のために」——一七世紀から一九世紀までの蘭日交流——(第二章)では、一連の「鎖国」令が發布された寛永期について、江戸参府を記録した平戸商館長カロンの日記を詳細に分析するとともに、ケンペルやドゥーフの記述や風説書のもった役割も検討した。それを通して幕府がオランダとの貿易を認めた最大の目的は海外の情報収集であったことを主張した。次に、劉序楓「『鎖国』体制下における日中交流—漂流・漂着船を通して—」(第三章)は、近世日中間に多発した漂流や漂着事件を悉皆的に整理・検討し、筆談録を通じて文化的交流、および漂流民送還関係の「咨文」のやりとりを中心とした政治レベルの交流を検討したものである。横山伊徳「太平洋世界と近世日本の変容」(第四章)では、一八世紀史研究で主張されている中国指向型世界市場が、一九世紀への移行期を経て、太平洋物流を組み込んで展開・変容していく過程を、日本社会の動きと絡めながら描き出した。

第三部のテーマは「思想と文化の視点から」である。まず、張寅性「開国の論理と心理—横井小楠精説—」(第五章)では、小楠の著作の綿密な分析を通して、政治的思惟の一貫性を指摘し、従来主張されてきた鎖国から開国への「思想的転回」が、実は状況対応的な政策の展開に過ぎないことを論じた。続いて、陳瑋芬「漢語・訳語・新語—近代日本における漢語概念の変遷について試論する—」(第六章)は、「自然」「文明」「文化」「哲学」などの概念が、日本の近代化に伴って「nature」「civilization」「culture」「philosophy」の訳語として生成された経緯を、漢文の影響を意識しつつ浮き彫りにした。最後に、朱徳蘭「近代長崎華僑社会の変容(一八五九—一九四五)」(第七章)は、華僑団体の国家意識と居留地意識、華商と日本人との交流活動、華僑学校の中国教育と日本教育などの側面について考察するものである。

各章はいずれも日本の「外」と「内」をめぐる議論である。日本国内の「鎖国」見直し論と呼応・連動しながら、理論的探究と実証的考察が共に最先端の水準に達している。また、台湾、つまり日本の「外」で交わされた日本史の議論を踏まえた、多国

籍の学者による共同研究であるという点で、本書は「国際日本学」を牽引する意欲的な論集と評価しても過言ではないだろう。新鮮かつ刺激的な多岐にわたる見解を包摂する本書は、これから「鎖国」と「開国」をめぐる議論において新たな方向性を導くものであると考える。

(彭 浩)

軍事史学会編

黒沢文貴・相澤淳監修

『海軍大将嶋田繁太郎備忘録・日

記I

——備忘録 第一—第五——

錦正社 二〇一七・八刊

A5 四六四頁 九五〇〇円

本書は日中戦争開戦期に軍令部次長を歴任し、対米英戦争開戦期においては海軍大臣を務めていた嶋田繁太郎海軍大将の備忘録を紹介している。第一冊の本書では、昭和一〇年二月から昭和一九年五月までを扱っている備忘録第一から第五までを収録している。嶋田繁太郎は、軍令部次長、海

軍大臣以外にも第二艦隊司令長官、支那方面艦隊司令長官などの要職で勤務した人物であり、彼が残した記録はこの時期を研究する研究者にとって示唆に富む史料になると考えられる。

備忘録「第一」は昭和一〇年二月に軍令部次長になってから一一年二月までの一年間の記録である。この時期は、第二次ロンドン会議が開催された時期であり、日本海軍が海軍軍縮体制から脱退する時期でもある。嶋田は「第一」で軍縮問題への対応に関する記述、軍縮脱退後の兵力整備の問題などについて述べており、この備忘録から軍令部が明らかに軍縮離脱の前提で第二次ロンドン会議に対応していた様子がうかがえる。また、二・二六事件に関連して、軍令部が後継内閣の人事問題などを含めて国内政治問題を幅広く扱っていたことが分かる。

「第二」は、昭和一二年一月から八月までを扱っている。この時期の記述では、一月の「機関科問題」、二月の海軍大臣交代問題などについての記述があり、嶋田の政治的活動を示している。それに加えて、

「第二」では七月七日の盧溝橋事件以降の日中戦争の拡大過程についての記述が目立つ。米内光政海軍大臣の紛争不拡大論から拡大論への転向など、軍内部の様々な議論が浮き彫りになっている。

「第三」は昭和一二年九月から一二月、第二艦隊司令長官に補されるまでの期間を収録している。この中で、嶋田は海軍が主導した上海戦の様子を、主に航空戦を中心として述べている。その内容は極めて詳細で、攻撃に参加した航空機の機種別の機数、発進時刻、攻撃目標などの細部内容まで記録している。

「第四」は、嶋田が海軍中央から離れて、第二艦隊、呉鎮守府、支那方面艦隊の司令長官を務めた、昭和一二年二月から昭和一六年四月までの時期を含んでいる。この時期の記述は、その量と記録頻度の面でこれまでより大きく減っている。第二艦隊司令長官時期は、命令文(大海令)、中国戦線の状況などを記録しており、呉鎮守府司令長官時期には建造中の艦船についての情報等を述べている。また、支那方面艦隊司令長官時期には、日中戦争の作戦推移に関す

る内容を示している。

「第五」は、昭和一六年四月から昭和一九年五月までの時期を記録している。嶋田は、昭和一六年一〇月海軍大臣に任命されたため、開戦過程における内閣内外の議論を詳しく述べている。開戦決定についての天皇の懸念、首相経験者である重臣たちの反応を紹介している。開戦以降も海軍大臣としてミッドウェー海戦、ガダルカナル戦などの主な戦闘についての記録を残している。

以上の通り、『海軍大将嶋田繁太郎備忘録・日記Ⅰ』は、嶋田の備忘録を収録しており、彼が軍令部次長、海軍大臣などを務めていた時期を示す大変貴重な史料であろう。

(アン・ジェイク)

家島彦一著

『イブン・バットゥータと境域への旅——『大旅行記』をめぐる新研究——』

名古屋大学出版会 二〇一七・二刊
A5 四八〇頁 五八〇〇円

本書の著者はインド洋海域史研究の第一人者であり、十四世紀の旅行家イブン・バットゥータの『大旅行記』全訳(平凡社、東洋文庫)を成し遂げた顕著者である。本書は、著者が長年の研究活動の中で見出した『大旅行記』の問題点を整理・再検討し、同書に基づく新たな研究成果をまとめたものである。以下、本書の構成に従って内容を紹介する。

本書は序論・結論と全三部からなり、各部分はそれぞれのテーマに沿った複数の章で構成される。第一部は、第二部・第三部の議論の前提となる『大旅行記』の基礎情報や問題点を提示する。第一章はイブン・バットゥータに関する情報や『大旅行記』の成立背景を、第二章は著者自身の『大旅行記』諸写本調査の結果を、第三章は『大

旅行記』の後世のムスリムの史書における評価やその研究史を述べる。第四章はマグリブ地方の紀行文学「メッカ巡礼記」の概観を示し、『大旅行記』が「メッカ巡礼記」の影響を受けつつも、必ずしもその伝統に囚われなかったことを指摘する。近年、著者が全訳を行ったイブン・ジュバイルの巡礼記との比較検討も行うなど、著者ならではの知見が随所に反映されている。

続く第二部・第三部は、『大旅行記』の中でもイスラーム世界と非イスラーム世界の「境域」についての記述に着目し、その十三・十四世紀の状況を分析する。「境域」を海と陸に分類し、それぞれを第二部、第三部にまとめ、大局的な図式の中で個々の地域を詳細に検討することで、イブン・バットゥータの伝える地域ごとの異なる性格を鮮明に描き出す。

第二部は海の「境域」を扱う。第一章は中国船のインド洋進出やイブン・バットゥータの中国訪問の真偽に関して、第二章はスムトラ・パサイ王国の成立、第三章はマルディヴ諸島、第四章はスワヒリ世界とクルワー王国、そして第五章はラースール

朝のスルタン・マスウードのクルワー王国亡命の事例から、アラビア海を介した人的交流について考察する。第二部は使用史料が非常に多彩であり、漢籍や著者がマルディヴでの現地調査で再発見した『マルディヴ年代記』や碑文も用いるなど、著者の長年の研究成果が凝縮されており、イブン・バットゥータ研究のみならずインド洋海域史研究の観点からも重要な意義を持つ。

一方、陸の「境域」を扱う第三部では、第一章はアヒーと呼ばれる指導者率いる若者集団に焦点をあてつつ、アナトリアでのトルコ・イスラーム化について論じる。第二章はアナトリアやバルカンで活躍したとされる聖者バーバー・サルトゥークについて、第三章はイブン・バットゥータのブルガール訪問の真偽について、第四章はヒンドゥー・クシュ山脈の交通路について、第五章はサハラ砂漠越えの長距離交易路と同地の王国について論及する。第五章は本書の白眉であり、西アフリカのマーッリー・タクルール王国という、同時代史料も限られるまさに「境域」の地の状況を『大旅行記』に依拠して丹念に描く。

以上のように、本書は「境域」に着目することににより、『大旅行記』が第一級の歴史史料であることを示し、その史料価値を余すところなく伝えると同時に、十三・十四世紀のアジア・アフリカの情勢を幅広くかつ詳細に検討している。膨大な量の知識を要する研究課題に真摯に取り組む著者の関心の広さと姿勢を、我々読者は見習うべきではなからうか。

(大矢純)

アルフレート・ハーファーカーンプ著

大貫俊夫・江川由布子・北嶋裕編訳

井上周平・古川誠之訳

『中世共同体論』

——ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人——

柏書房

二〇一八・六刊

A5 四〇八頁 六八〇〇円

本書はトリリア大学（ドイツ）中世史講座の名誉教授アルフレート・ハーファーカーンプがこれまで発表してきた数多くの研究成果の中から、特に社会的視座をもつ七

論文を訳者が選び出し翻訳したものである。七篇はハーファーカーンプの研究を貫く軸といえるテーマ「都市」、「共同体」、「ユダヤ人史」への視点をそれぞれ紹介する形で第一部「中世都市論の展開」、第二部「共同体の諸形態と宗教性・公共性」、第三部「キリスト教社会とユダヤ人共同体」という構成のもと収められている。本書の編訳者三名はハーファーカーンプの指導下で博士論文を執筆しているが、そのうちの江川氏と大貫氏が「解説」と「訳者あとがき」でその経歴や研究姿勢について記しており本書の読解にも有益である。以下、簡単に内容を紹介する。

第一部第一章「中世盛期・後期における『初期市民的』世界—地域史と都市社会の歴史」ではこの論文が発表された一九七五年までの都市史研究の動向が概観される。都市を孤立した存在として扱うのではなく、周辺と結びつけて研究する地域史的手法の重要性が指摘される。第二章「盛期中世の『聖なる都市』」では、主にドイツの司教座都市が自らを「聖なる都市」と表現していたことが描かれる。この心性は、教会建築

等でのイエルサレムやローマの模倣、聖遺物移管等によって強化された。第二部第一章「共同体における生活——十二世紀における新旧の諸形態」は当該期に西欧キリスト教世界で生じた、多くの新しい共同体の成立を説明する。修道院の創設、また従来の身分や教会ヒエラルキーと対立する形で、慈善や隣人愛が注目され宗教共同体の中で実践されたことが叙述される。第二章「大鐘を鳴らして知らしめる——中世の公共性について」は、ハーバーマスらの、公共性は十八世紀に形成されたという説に反論する形で、十一—十二世紀の西欧キリスト教圏に公共性の基盤が見られることを、都市の鐘が保持した機能・重要性をもとに説く。第三章「十二、十三世紀における兄弟会とゲマインデ」では兄弟会が中世初期から後期の都市において貧者・病人・よそ者への扶助や魂のケアに関する領域で重要な役割を保持したことが明かされる。第三部第一章「中世アッシュケナジム空間におけるキリスト教徒とユダヤ人の『共同市民制』」は、ドイツの都市で十世紀以降、キリスト教徒共同体と並んで確認されるようになるユダ

ヤ人共同体の定住史及び組織・制度を扱っている。第二章「一〇九〇年までのオットー・ザリア朝における司教とユダヤ人の諸関係」ではドイツにおけるユダヤ人定住の際に司教が果たした積極的役割が説明される。彼らはキリスト教の救済史で重要な位置づけにあるユダヤ人を自らの司教座都市に呼び込むこと、それにより古代以来ユダヤ人居住区を持つローマを模すことで、自都市の名譽を高めようとした。

中心的に扱われているのは中世盛期ドイツの事象であるが、それ以外の時代・地域の研究に対しても刺激に満ちた一書といえよう。

(阿部ひろみ)

竹中亨著

『ウィルヘルム二世』

——ドイツ帝国と命運を共にした「国民皇帝」——
(中公新書)

中央公論新社 二〇一八・五刊
B 40 一四〇頁 八二〇円

本書は、一九世紀後半から第一次世界大戦末までという激動多難の時代に「国民皇帝」たろうとした、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世の評伝である。彼の内面やそれに基づく行動が本書には主に叙述されており、幅広い読者が楽しめる一冊となっている。

その叙述ゆえに彼の視角とドイツ社会や国際情勢の実際とのズレがより浮き彫りにされる。まずはウィルヘルム二世の性格である、独善的で剛直な外面と情緒不安定な内面の形成をめぐる経緯が描かれる。その「二人のウィルヘルム」は以後様々な局面で顔を出した。

「ドイツ」に国家連合色が色濃く残る時期にも、ウィルヘルム二世は個人統治を目指した。あらゆる政治決定に関与せんとし、

ビョルケの密約のように独断で条約を結ばうとすることさえあった。しかし時代錯誤な君主観と情勢把握能力の乏しさのせいで、方針決定をめぐる議論の埒外に彼はつねに置かれていた。

第一次世界大戦中でもヴィルヘルム二世の認識と実際との乖離は埋まらなかった。大本営での安穩とした指揮と生活や退位決断の引き延ばしなどの事例に、それがあらわれている。ここには「夢遊病者」の一人として、果断とは無縁のヴィルヘルム二世が描かれている。

ドルンでの隠遁生活や共和制への憤懣、七首伝説の信奉、ナチへの期待を自身の復位と結びつける亡命中の彼の姿からもズレが浮き彫りにされる。しかし大衆政治が確立されたヴァイマル期や、原子化された大衆からのカリスマが登場したナチ期に、王朝の伝統的權威にねざす「君主」が呼び戻されるはずもなかった。

ズレと並んで本書で浮き彫りにされるのが、「国家連合から統一国民国家へ」という滔々とした歴史の流れのなかで、それに乗り、流れを加速しようとした「ヴィルヘルム二世の姿である。たとえば彼は「セダン記念日」を大々的に祝い、映画や写真のようないメディアを活用して、帝国を象徴する事物の普及に腐心した。それと同時に自らの「偉大さ」や庶民への「近しさ」をアピールした。

重工業化が進み、個別の利害が重視され、統一ナショナリズムや排外主義、拡張主義が大衆のなかで発展しはじめた一九一〇世紀転換期においても、挑発的な演説や発言ならびに艦隊拡張のように自身の地位やドイツの国力を誇示せんとする、彼の思う「国民皇帝」としての方針が、大衆の排外主義や拡張主義を煽った。そうした活動が彼の迷惑の外で、当時の国民意識を統一的な「ドイツ」ナショナリズムへと変化させる役割を担うことにもなった。ヴィルヘルム二世はドイツの統一的国民国家化に「たくましくして」貢献したのである。

小国の割拠分立から統一国民国家へ、農業国家から工業国家へ、ブルジョア、官僚社会から大衆社会へと加速度的にドイツが変貌する時代を経験するも、封建的価値観を手放すことができず、矛盾と複雑さをつ

ねにかかえていたヴィルヘルム二世。その姿に近現代ドイツ史の一つの縮図を投影する本書の一読を薦めたい。(前田充洋)

イレナー・パウエル著

河合秀和訳 早坂眞理翻訳協力

『ホロコーストを生き抜く』

——母の伝記と娘の回想——

彩流社

二〇一八・三刊

A5

四四五頁

四六〇〇円

オール・ヒストリーが歴史学の一分野として地歩を固めて久しい。だが「聞く」と「書く」との間には様々な葛藤があり、傍証となる史料を「読む」ことを通じてそれを乗り越えていくほかない。本書はそうした試みの産物であり、それゆえにそこには複雑で微妙な歴史の襞が書き込まれている。本書の原題は *The Daughter Who Sold Her Mother* (母を売った娘) といっただらめものだ。著者は聞き取りの際にしばしば「私を売り物にしないで!」と言う母の拒絶に直面した。それは生後間もない

娘を抱え「死神を騙し抜いて生き延びた」母の心の遍歴が政治体制や歴史へと還元されてしまうことへの抵抗であった。

著者の両親はともにガリツィアの典型的なユダヤ人社会（シュテトル）に生まれ、ユダヤ教の因習を脱しようとしてコミュニケーションに近づく。母サルナと父ロメクの間に著者イレナが生まれたのは、一九四一年独ソ戦が始まる直前のルヴフ（現ウクライナのリヴィウ）においてであった。そこはティモシー・スナイダーが言う「流血地帯」『ブラッドランド』筑摩書房、二〇一五年）のまったく中であり、ナチズムとスターリニズムの対立と連携の狭間でユダヤ人・ウクライナ人・ポーランド人の憎悪の三角関係が育まれた場所でもあった。ユダヤ系ポーランド人の両親と娘はこうした中でドイツ占領下のゲットーでの生活と逃亡、ソ連軍による「解放」に伴う希望と幻滅の結果に、第二次大戦後ポーランドの「社会主義建設」に献身する。だが安定した生活は長く続かなかった。一九五三年、スターリンの死の直前におきた「医師団陰謀事件」はソ連社会に伏流水のように存在して

いた反ユダヤ主義を噴出させた。それはパレスチナ問題を軸に反イスラエルの動きと連動し、一九六七年の「六日戦争」を機にポーランドで沸騰する。当時の世界は「プラハの春」やフランスの「五月革命」など「若者の反乱」の時代として印象付けられている。だがポーランドで「三月事件」（ワルシャワの学生運動鎮圧）の後、ゴムウカ政権が公然とユダヤ人排斥を呼び掛けたことはあまり知られていない。一九六七年に著者はオックスフォード大学に留学し日本文学を専攻、一九六八年以降、解雇された父と母も相次いでワルシャワを離れる。父はアメリカを経て西ドイツ難民となり、いったんイスラエルに住んだ母は西ドイツの父と合流する。しかし両親の関係は冷え切り、二人は「過去」をめぐりお互いに傷つけ合う。一九九七年に父がドイツで死ぬと、母はイギリスに住む娘のもとに身を寄せる。イギリスの日本研究者ブライアン・パウエルと結婚し、自らも大学で日本文学を講じていた著者は、「記憶」と「回想」をめぐり晩年の母と格闘しながら、そのトラウマに思いを寄せる。執筆の契機は、祖

母から「ユダヤ人の遺産」に学べと聞かれ続けた二人の息子の強い勧めであったという。

スナイダーは「流血地帯の歴史が書かれたことはない」と指摘しているが、本書はまさにその「地域」の歴史叙述の必要性を、ホロコーストを生き抜いた母と娘のオーラル・ヒストリーとして物語っている。

（加藤史朗）